

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730580

研究課題名(和文) 妄想的な加害感の生起メカニズムに関する研究

研究課題名(英文) Why do the conviction of offensive cognition become stronger?

研究代表者

佐々木 淳 (Sasaki, Jun)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：00506305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：妄想的加害感とは「他者に不快感を与えている」と事実と反して悩む症状である。本研究の目的は、加害感の妄想性がどのように生じるのかを明らかにすることである。本研究の結果、加害感をなんとか抑えなければならぬと考えていたり、加害感をコントロールできない、と捉えている人ほど確信度が強まっていることが明らかになった。確信度の高まりには、加害観念に対する認知的なコントロールへの態度や仕方が関係していると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to investigate how the conviction of offensive cognition became stronger. As a result, people who tried to control the offensive cognition or felt that they could not control the offensive cognition tended to make their conviction stronger. It suggests that the conviction is associated with the cognitive strategy or belief to control symptoms.

研究分野：臨床心理学

キーワード：加害感 メタ認知 妄想 思考コントロール 自己関係付け schizotypy 対人恐怖症 認知行動療法

1. 研究開始当初の背景

加害感とは「他者に不快感を与えている」と事実と反して悩む症状である。この症状に加えて、この内容を妄想的に信じる事例が多く報告されている。ひとたびこのような妄想性を呈すると対人コミュニケーションの質が低下し、患者の社会的機能が非常に阻害される。そのため、妄想的な加害感が生起するメカニズムを明らかにし、介入方法を検討する必要がある。更に妄想的加害感以外の妄想性を伴う精神疾患との鑑別が問題になる場合も多く、介入方法の選択に混乱をきたしているのが実情である。従来事例研究の蓄積をベースに、実証的研究から妄想性の生起メカニズムを明らかにすることが求められているといえよう。現在、欧米でも加害感をもつ症例が報告されるようになっただけでなく、最新版の国際的診断基準 DSM-5 では、「社交不安症」にこの加害感の特徴を持つ症状が含まれるにいたっている。よって本領域の研究の意義は今後高まっていくものと考えられる。研究代表者は、加害感の測定尺度である Social Anxiety Discomfort to Others Scale (SA-DOS; Rector et al., 2006) の日本語版を開発しており (Sasaki, 2009)、この残された研究課題に取り組む準備を行ってきた。

妄想的加害感をもつ一群の症例には、他者の何気ないしぐさを自分に結びつける認知的傾向がある。この「関係付け的思考 (referential thinking)」を持っている人は、「他者を不快にした」という疑いが生じると他者のしぐさを参照し、自分への結びつけを繰り返し行うため、「こんなしぐさをするのは、相手を不快にってしまったからに違いない」と、確信に至ると予想される。

この関係付け的思考への治療介入を考える際、関係付け的思考の存在が発達による一時的なものか、継続的な認知特性であるのかは重要な点であろう。また関係付け的思考は、発達の過程 (思春期・青年期) に誰も持ちうるものであるが、妄想的加害感を訴える症例はその時期に限らない。発達の過程で生じるのとは質の異なる関係付け的思考の存在も同時に想定しつつ検討する必要があると考えられる。Lenzenweger et al. (1997) は、一般人口に継続してみられる認知的特性を想定し、Referential Thinking Scale (REF) を開発している。研究代表者らのグループは日本語版 REF 尺度を開発し、信頼性・妥当性を確認している (川口, 2012)。関係付け的思考が世代間でどのように推移するのかを確認し、関係付け的思考が一般的に加害感の確信度へ寄与しうるかを確認する必要がある。

不安障害に関する従来症状生起メカニズム研究では、症状の頻度 (症状の有無) のみを測定する 경우가多く、症状体験のされ方 (e.g., 確信度, 苦痛度, 心的占有度など) が生じる理由については迫れないという問題

点があったと考える。本研究では多次元アセスメント (e.g., Garety & Hemsley, 1987) の手法を採用することで、症状の頻度と共に確信度などをアセスメントし、加害感の確信度に及ぼす影響を検討してゆく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、加害感の妄想性がどのように生じるのかをいくつかの視点から明らかにすることである。第一の視点は加害感に対するメタ認知や対処方略のあり方によって妄想性が高まっているかどうかについての検討 (研究 1)、第二の視点は、関係付け的思考がどのように発達の推移しており、確信度の形成に寄与しているのか (研究 2、3)、という視点である。

3. 研究の方法

研究 1 の調査協力者は、大学生 214 名 (男性 99 名, 女性 115 名, 平均年齢 19.939 歳, 18~29 歳, SD=1.813) であった。

調査手続きは集団式質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、事前に研究の主旨、調査への参加は自由意志であること、データの匿名性は守られ本研究以外では使用されないことを説明し、フェイスシートの同意欄に参加意思の表示を求めた。同意した協力者のデータのみを分析対象とした。

本研究では以下の尺度を使用した。まず、1) Rector et al. (2006) が開発した SA-DOS 尺度日本語版 (佐々木, 2009) である。全 26 項目について、頻度、苦痛度および確信度の 3 つの次元から 5 件法で回答を求めた。2) 反すう傾向の測定には、不確実な対人場面における他者の本心についての反すう尺度 (津田, 2011; 「反すう」「反すうの切り替え」の 2 つの下位尺度) を用いた。3) また、不快な考えが浮かんだ時の対処方略を尋ねる Thought Control Questionnaire 日本語版 (山田・辻, 2007; 「認知能力への自信のなさ」「心配に対するポジティブな信念」「認知的自己意識」「思考統制の必要性に関する信念」「思考の統制不能と危機に関するネガティブな信念」の 5 つの下位尺度)、および 4) 観念の認知的コントロール傾向をとらえる Metacognitions Questionnaire 日本語版 (山田・辻, 2007; 「気晴らし」「罰」「再評価」「心配」「社会的コントロール」の 5 つの下位尺度) を用いた。

研究 2 と研究 3 は 140 万人のモニターを有する調査会社に依頼し、1000 人規模の調査を行っている。10~50 代の男女に対して、SA-DOS の三次元 (頻度・苦痛度・確信度)、REF、に加え、思春期・青年期の関連付け的思考を測定する「自己関連付け尺度」(金子, 2000) 等を実施している。

4. 研究成果

研究 1 については、日本心理学会第 77 回大会にて連名発表を行った (橋本・佐々木, 2014; 佐々木・橋本, 2014)。

SA-DOS の多次元アセスメントと相関分析の結果から、健常な大学生にも加害観念は体験されており、この観念は苦痛や確信を伴いやすいことが示唆された。特に、頻度と確信度との相関から、繰り返し加害観念を体験することによって確信が高まっている可能性、あるいはこうした内容の観念が確信につながりやすい可能性が示唆された。その他、頻度と苦痛度の相関から、加害観念が浮かぶこと自体が苦痛である可能性が、苦痛と確信度との相関から、苦痛も確信を高める一つの要因になっている可能性が示唆された。

加害観念と反すうの相関係数から、繰り返し考えることが加害観念の体験を増加させている可能性が示唆されたが、反すうによって苦痛や確信が強まるメカニズムは想定しにくいことが明らかになった。反すうは観念の質ではなく、観念自体の量を増加させる働きを持っていると考えられる。また、加害観念をなんとか抑えなければならぬと考えていたり、加害的な思考が統制できない、と捉えている人ほど確信が強まっていることが明らかになった。確信度の高まりには、加害観念に対する認知的なコントロールへの態度や仕方が関係していると考えられる。

次に、SA-DOS の各次元を偏相関分析によって統制した結果を紹介したい。苦痛度の次元を統制したが、その後も頻度と確信度との関係性は依然として強いことが明らかになった。よって、苦しさで心がいっぱいになるような感情的負荷によって確信が高まっているわけではない点が示唆された。あわせて、確信度を統制しても頻度と苦痛との相関は依然として見られることから、確信の度合いに関係なく苦痛な内容の観念であることが示唆された。

更に、苦痛度を統制した確信度の偏相関分析からも、思考をなんとか抑えなければならぬと考えていたり、思考が統制できない、と考えている人ほど加害観念の確信度が高まることが示唆された。

研究 2, 3 は関係付けの思考にフォーカスをあて、特性的な関係付け的傾向と発達的な関係付け的傾向の年代別の推移を検討している。この調査結果については現在精査している最中であるが、大まかに年代別の平均値を算出した結果から言えば、どちらに関しても年齢が上昇するにつれて、関係付け的傾向が弱まる方向性であった。ただし、これは途中経過の一部であり、加害感の確信度への寄与を含め、最終的な結論に関しては、国内外の学会誌で発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

Zhou, B., Lacroix, F., Sasaki, J., Peng, Y., Wang, X., & Ryder, A. G. (2014). Unpacking

Cultural Variations in Social Anxiety and the Offensive-Type of Taijin Kyofusho Through the Indirect Effects of Intolerance of Uncertainty and Self-Construals. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45, 1561-1578. doi: 10.1177/0022022114548483. 査読有.
Sasaki, J., Wada, K., & Tanno, Y. (2013). Understanding Egorrhea from Cultural-Clinical Psychology. *Frontiers in Psychology*, 4:894. doi: 10.3389/fpsyg.2013.00894. 査読有.
Sasaki, J., Sakamoto, S., Moriwaki, A., Inoue, K., & Ugajin, K. (2013). The recognized benefits of negative thinking/affect in depression and anxiety: Developing a scale. *Japanese Psychological Research*, 55, 3, 203-215. 査読有

[学会発表](計 17 件)

橋本真希・佐々木淳 (2014). 対人恐怖症の加害観念の確信度を高める要因(1): 多次元アセスメントと相関分析による検討. 日本心理学会第 78 回大会(同志社大学). 2014 年 9 月 10 日.

佐々木淳・橋本真希 (2014). 対人恐怖症の加害観念の確信度を高める要因(2): 偏相関分析による検討. 日本心理学会第 78 回大会(同志社大学). 2014 年 9 月 10 日.

照田恵理・佐々木淳 (2014). 情動知能と心のゆとりの回復過程: 情動知能によるプロセスの違いと臨床への応用(大会シンポジウム). 日本心理臨床学会第 33 回秋季大会(パシフィコ横浜). 2014 年 8 月 25 日

佐々木淳 (2014). はじめて出会う認知行動療法の基礎・基本. 丹野義彦(企画), 認知行動療法・論理情動行動療法の基礎・基本: はじめて出会う認知行動療法(自主シンポジウム). 日本心理臨床学会第 33 回秋季大会(パシフィコ横浜). 2014 年 8 月 23 日

Zhao, Y., Zhou, B., Sasaki, J., Peng, Y., and Ryder, A. G. (2014, July). Social Anxiety in Canada, China, and Japan: Mediation by Intolerance of Uncertainty and Fear of Negative Evaluation. Poster presented at 22nd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP2014), Reims, France. 2014 年 7 月 18 日.

竹田剛・佐々木淳 (2013). 神経性過食症患者の自己概念と重要性に対する包括的参照枠の検討. 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会. 2013 年 10 月 12 日

片岡泉・佐々木淳 (2013). 「ひとり行動」状況での心理的苦痛についての研究(2): 社会不安及び愛着関係との関連からの検討. 日本心理学会第 77 回大会(北海道医療大学). 2013 年 9 月 20 日

片岡泉・佐々木淳 (2013). 「ひとり行動」状況での心理的苦痛についての研究(1): ひとりで行動するときの苦痛はどのよう

に緩和されてゆくのか(大会シンポジウム). 日本心理臨床学会第32回秋季大会(パシフィコ横浜). 2013年8月27日.
佐々木恵太郎・佐々木淳(2013). 試行カウンセリングにおける洞察体験プロセスに関する研究(大会シンポジウム). 日本心理臨床学会第32回秋季大会(パシフィコ横浜). 2013年8月25日
竹田剛・佐々木淳(2013). 神経性過食症患者のパーソナリティ特徴の分類: 自尊感情向上のための介入のアセスメントツール(大会シンポジウム). 日本心理臨床学会第32回秋季大会(パシフィコ横浜). 2013年8月25日
佐々木淳(2012). 社交不安障害・対人恐怖症研究からみたパーソナリティ心理学の意義. 日本パーソナリティ心理学会学会活性化委員会/大会準備委員会(企画). パーソナリティ心理学の未来を探して(大会・委員会企画シンポジウム). 日本パーソナリティ心理学会第21回大会(島根県民会館). 2012年10月7日.
佐々木淳(2012). 企画責任者と司会. 日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会(企画). 応用を目指す心理学者からのメッセージ: 社交不安の立場から(委員会企画シンポジウム). 日本パーソナリティ心理学会第21回大会(島根県民会館). 2012年10月7日
佐々木淳(2012). 認知行動療法における治療関係: 指定討論. 葉柴陽子・新井万佑子(企画). 認知行動療法における治療関係(自主シンポジウム). 日本心理臨床学会第31回秋季大会. 2012年9月14日
佐々木淳(2012). 基礎学と臨床実践の射程: 指定討論. 飯島雄大・佐々木淳・守谷順・上野真弓・高野慶輔(企画). 基礎研究をどのように臨床実践に活用するか(自主シンポジウム). 日本心理学会第76回大会. 2012年9月13日
安達友紀・中江文・佐々木淳(2012). 標準的催眠誘導における覚醒度の推移. 日本心理学会第76回大会(専修大学). 2012年9月12日

[図書](計 6 件)

佐々木淳(2015). 対人不安. 森脇愛子・坂本真士(編), 対人的かわりからみた心の健康. 北樹出版, 48-61.
佐々木淳(2013). 妄想性・統合失調型・統合失調質パーソナリティ. パーソナリティ心理学ハンドブック. 福村出版, 336-342
佐々木淳(2013). 精神病理. 藤澤文(編), 教職のための心理学. ナカニシヤ出版, 161-169.
佐々木淳(2013). 研究法を学ぶブックガイド. 臨床心理学, 第13巻第3号, 金剛出版, 380-381.
佐々木淳(2013). 認知行動療法. 日本認知心理学会(編). 認知心理学ハンドブック.

有斐閣, 394-395.

佐々木淳(2012). パーソナリティ障害に対するスキーマ療法の進歩(佐々木淳翻訳・伊藤絵美監訳). 東斉彰(編), 認知療法の発展: 理論, 臨床, 研究. 岩崎学術出版社, 54-78.

杉山崇・巢黒慎太郎・佐々木淳・大島郁葉(2012). 認知療法と治療関係. 東斉彰(編), 認知療法の発展: 理論, 臨床, 研究. 岩崎学術出版社, 144-170.

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 淳(SASAKI, JUN)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号: 00506305

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし